慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J. バトラーにおける「物質」について：『問題=物質となる身体』の検討から
Sub Title	
Author	長野, 慎一(Nagano, Shinichi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2009
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.68 (2009.) ,p.156- 159
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成20年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000068-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ている国際学会の発表準備を万全にし，フィードバックを幅広く受け，インド研究者との交流も期待したい。

主要参考文献

Jodhka, Surinder S and Avinash Kumar (2007). Internal Classification of Scheduled Castes: the Punjab Story in *Economic and Political Weekly*. **42** (43).
Judge, Paramjit S and Gurpreet Bal (2008). Understanding the paradox of changes among Dalits in Punjab in *Economic and Political Weekly*. **43** (41).
Thorat, Sukhadeo (2009). *Dalits in India: search for a common destiny*, New Delhi, Sage.
由井義通（2008）．デリー．橋本・藤田・吉原編．世界の都市社会計画．東信堂.

J. バトラーにおける「物質」について

――『問題＝物質となる身体』の検討から――

長　野　慎　一

1．問題の所在と本研究の目的

バトラーの構築主義的論考に対しては，これが身体の物質的基盤を否定するものであるとの批判がある(e.g. Hull 1997; Duden 1998=2001)。しかしながら，言語と物質の関係に関するバトラーの分析は，正しく理解されれば，唯物論的なものであることが分かる。本研究の目的は『問題＝物質となる身体』(Butler 1993)の所論の検討を通して，「物質」に関するバトラーの分析の唯物論的側面を明らかにすることである。

2．物質化の過程と抹消される物質性

バトラーは，『問題＝物質となる身体』(Butler 1993)の冒頭で，「物質」の構築に関する理論は物質の単一の原因を言語に求める言語一元論ではないと明言している(Butler 1993: 4–6)。バトラーは，この種の誤りに基づく構築主義批判をかわし，かつ物質を与件とせずに，物質と言語の関係について考察するために，「物質化の過程」という概念(Butler 1993: 9)を提唱している。この概念を通して分析されているのは，実体としての物質ではなく，実体であるとする措定それ自体によって物質と呼ばれるものが実体化されていく過程である。

バトラーは「物質」に替えて「物質性」という用語をしばしば使用するが，これは物質化の相関項としての物質の様相を表すときに特に好んで使用されている(e.g. Butler 1993: 29–30, 34–35)。なお，「物質性」という語は自己同一的な現前として実体化される物質を表す場合に使用されているだけではなく(e.g. Butler 1993: 34–35)，そのようなものとして措定されずに，現前化を禁止されている物質の様相を表すのにも使用されている(e.g. Butler 1993: 38)。

物質化の過程という構想を肉付けするための不可欠な項目はやはり言語行為である。特に，フーコーに依拠するバトラーは，言語行為の成否は，権力関係の（再）生産の手段として配置される言説に適合

的か否かにかかっていると考えている(Butler 1993: 35)。つまり，純粋な指示それ自体は原理的に不可能であるというのが，バトラーの理論の根底にある前提なのである。というのも，純粋な指示とみなされる言語行為は，その言語行為に託されている理念とは裏腹に，権力関係の相関物であるからだ。となれば，指示するとは命じること／従うことに通ずるものといえる。ただし，バトラーは指示という営為一切を否定してしまうわけではなく，それを別の構想のもとに再配置するのである。

彼女は，純粋な指示という理念をその理念自体のパフォーマティヴな（つまり，ある事態をつくり出す）性格を軸に再構成する。純粋な指示という理念は，指示が指示するもの(指示対象)の成立に非関与的であることを要請するが，そのようなものとして措定される対象領域は，まさにそのような要請を己の成立条件としている。バトラーは，このことを「言語の外部に物質性を措定することは，いまだに，そのような物質性を措定することであり，そのように措定された物質性は，その措定を構成的条件として保持する」と表現している(Butler 1993: 67–68)。つまり，バトラーにおいて，それ自体の権利において存在すると理解可能な領域に帰属する対象たる物質は，その境界に関して，己に対する接近の手段である言語に規定されているのである。物質化の過程とは，権力関係を支え，またこれに支えられている言語行為によって，自己同一的な指示対象としての物質が存在する領域を措定していく過程であるといえる。

他方で，視点を逆転させてみると，自己同一的に存在する対象としての物質の領域を措定するとは，そうでない物質を存在することが認可されない領域へと棄却していくことである。バトラーはJ.デリダのパフォーマティブ論に依拠して，ある指示が，別の指示の可能性の排除のもとに成立していることに着目している。

デリダは，パフォーマティヴな言語行為の成否は，記号の「反覆可能なモデル」に従って，それが同定できるかいなかにかかっていると論じる。個々の言語行為，その主体，その行為の場面といった現前は，「反覆可能な構造」の効果として，「相対的純粋性」を獲得しているのである(Derrida 1990=2002: 28, 44-47, 50)。重要な点は「相対的」という部分である。デリダは，同一者が同一者として自己を提示するとき，それを可能にする記号が，それとして成功裏に反覆されるのは，記号の「一般的な反覆可能性の内部に位置するほかのさまざまな反覆に抗して」であると述べている(Derrida 1990=2002: 45, 50)。つまり，ある言語行為を成功に導く特定の反覆可能性が生まれるのは，別の反覆可能性と競合し，これを排除することによってなのである。こうしたデリダの議論に論拠を得ることで，バトラーはある種の物質性が存在論的に確固とした地位を獲得することは，別種の物質性の可能性が排除されることによってであると議論を進めるのである。

バトラーがいうには「権力が，対象領域，理解可能性の領域を，所与の存在論として構成する」ときに同時に「根源的に物質化に抵抗するか，もしくは，根源的に脱物質化されたままである，根源的な理解不可能性の領域」が形成される(Butler 1993: 35)。デリダに依拠しつつバトラーが説くには，言語と言語が現前化させる指示対象である物質の間の関係は自己完結的な二項対立として成立しているのではなく，この関係はこれに相関して不在化される物質の領域を理解不可能なものとして排除することで可能になっている。この排除される領域は，上記の自己完結的二項対立の形成の帰結として生じるので，この対立にとっては，「内的」であり，したがって「構成的もしくは相対的外部」と呼ぶべきものである(Butler 1993: 39)。

この視座は，「セックス」を軸に展開する記号作用の説明に応用されており，次の問いに接続されて

いる。異性愛主義的で女性嫌悪的な「セックス」の二元論に基礎を置く言説において，物質として主題化可能にされる領域は，いかに主題化不可能な「構成的もしくは相対的外部」というコストを必要としているか。バトラーがL.イリガライを頼りにプラトンの存在論を検討する理由も，この問いに答えるためである。

結論のみ要約的にいえば，異性愛男性による支配を可能にしている言説(プラトンに代表されるような)においては，現前しうる指示対象の秩序は，その種の身体を備えていると認知された主体のみが「セックス」について真理を語ることが可能になるように，規整されているとバトラーは論じている。その結果として，女性の身体は現前するようにみえても男性の反射板としてであり，それ自体の権利において，物質として存在することは禁止されている(Irigaray 1977=1987, 1974=1985; Butler 1993: 36–55)。つまり，男根ロゴス中心主義的言説が設定する言語／物質の二項対立においては，女性の身体それ自体なるものは，自己同一的な指示対象として存在する物質としては措定することが不可能なものなのであり，抹消される物質性なのである。

3. 唯物論者としてのバトラー

物質に関するバトラーの分析は，言語／物質の二項対立から排除される「相対的外部」を見据えている。それゆえにバトラーはパフォーマティヴな言語行為という束縛から解放された対象領域を前提とすることを批判する。バトラーはそれを次のように表す。

> ある物質性を言語の外部に措定することは，当の物質性が言語とは存在論的に異なると考えられる場合には，言語が根源的な他性を指示したり，これに一致するかもしれない可能性を切り崩すことになる(Butler 1993: 68)。

この一文は解釈次第では，絶対精神（ヘーゲル）がちょうどそうするように，言語が自己の内へと対象世界をくまなく包摂すると論じるものと理解できなくもない[1)]。しかし，この一文は，指示の純粋なメディアとしての言語／言語に先立ち存在しており，指示されることを待っている物質という理念的な二項対立への信奉が，その対立の成立の代償として生み出す構成的外部を考慮しないことへの批判なのである。

デリダはその種の理念的二項対立に依拠する唯物論を「形而上学的唯物論」と呼び批判している。それは自らが記号の反覆可能性の構造の中にある一種のテクストであることを，つまり，自らが指示として正統であり得るのが覇権的な反復構造に従う限りにおいてであることを忘却し，己の指示と指示対象それ自体との一致を自負するのである。他方で，デリダは，「精神／物質，形式(形相)／物質(質料)，観念論／唯物論」の二項対立の閉域が出会い損なうその外部に残る異質性として，物質について書くこともなお唯物論的といえるかもしれないと肯定的に述べている(Derrida 1972=2002: 95–100)。

バトラーもまた後者の意味での唯物論的分析に従事しているのである。この前提のもとに，特定の名のもとに，抹消された物質性を指示し直す対抗戦略に対して，バトラーが下す両義的判断を理解しなければならない。

先述のイリガライの分析において，バトラーはイリガライとともに女性の物質性の排除を主題化した。バトラーの説明によれば，イリガライが示すのは，男性による女性の支配を促進するように仕組ま

れている指示の体系において，自己同一的なものとして存在する余地がないはずの女性の身体という対象について，その体系からすれば不適切にも語ることが，その体系を攪乱し，改変する可能性を持つことである(Butler 1993: 48)。その際，バトラーは，言語による指示／言語による指示の対象としての物質という二項対立の構成的外部に残る女性の物質性が，別様の引用によって現前化する可能性を肯定しているように思われる[2)]。

同時に，バトラーは，抹消された物質性としての女性を指示し直すパフォーマティヴィティが分離主義的傾向に向かうことに対しては常に警戒をしている(e.g. Butler 1993: 87)。そのわけは，女性の物質性が何であるかを単一の形態のもとに収束させ，その形態に収まる者のみを主体として認可するような言語／物質の二項対立は，やはり，その形態に収まらない物質性を構成的外部へと抹消するからである。このことからわかるのは，バトラーは，抹消された物質性（たとえば，女性のそれ）を指示し直す対抗戦略に，別様の物質性の形成の構成的条件を生じさせる可能性を認めると同時に，そのような対抗戦略もまた己の産出するであろう構成的外部（たとえば，ある種のセクシュアリティや「人種」）との遭遇によって改変されるべき可能性を指摘しているのである。

以上のように，バトラーは言語が言語に先立つ物質それ自体をあますことなく指示する可能性を否定する点において唯物論者ではないが，他方で，権力関係に支えられ，またそれを更新する反覆構造の中で，言語が自己同一的に存在するものとして措定することに失敗した物質性を指示し直す可能性を，言語のパフォーマティヴィティの中に探求し，このことをもって，物質性の未定性を担保しておこうとするという意味において唯物論者なのである。

注

1) たとえば，冒頭のハルはそのような読解をしてバトラーを絶対精神の再演であると批判する(Hull 1997; 24)。
2) この点に関しては，近代医学の眼差しによって，理解不可能にされる女性の身体経験に関して史料を通して記述し直そうとするドゥーデンの試み(Duden 1987=1994)は，本人は認めたがらないだろうが，バトラーと同じ方向性にあるとすらいえる。

引用文献

Butler, Judith, (1993). *Bodies That Matter, On the Discursive Limits of "Sex"*, Routledge.

Derrida, Jaques, (1972). Positions, Minuit．高橋允昭訳．(2002)．ポジシオン．青土社.

————, (1990). Limited Inc．高橋哲也・増田一夫・宮崎祐助訳．有限責任会社．法政大学出版局.

Duden, Barbara, (1987). Geshichte unter der Haut, Ein Eisennacher und seine Patientinnen um 1730, Stuttgart (Klett-Cotta)．井上茂子訳．(1994)．女の皮膚の下——十八世紀のある医師とその患者たち〈新版〉．藤原書店.

————, (1998). "Die akademische Dekonstruktion der Frau, Judith Butler," *Sammlung I, Ausgewählte Schriften und Vorträge 1991–1998*, Schriften Bremen..．北川東子訳．(2002)．女性を「脱構築」で切り刻んではならない！．環，7, 44–56.

Foucault, Michel, (1976). *Histoire de la sexualité vol.1, La volonté de savoir*, Gallimard．渡辺守章訳．(1986)．性の歴史Ⅰ——知への意志．新潮社.

Irigaray, Luice, (1977). *Ce sexe qui n'en set pas un, Minuit*．1987棚沢直子・小野ゆり子・中嶋公子訳．(1987)．ひとつではない女の性．勁草書房.

————, (1974). *Speculum de l'autre femme, Les Editions de Minuit*. Gillian C. (1985). *Gill, taras* "Une mere de Glace," Speculum of Other Woman, Cornell University.